

松尾芭蕉と交通インフラ

CNCP 個人正会員

坂本技術士事務所

坂本 文夫



宮城県松島町に滞在する機会を得たので、気になっていた津波被害の状況を調べたところ、被害は見られなかった。その理由は松島湾の地形が大いに関係しており、湾口が狭く水深が浅い、そのうえ 200 以上の島々が散在している。この地形が幸いし、押し寄せる津波の威力を弱めたといわれている。

観光名所の雄島、瑞巖寺、五大堂に足を運んだ際、松尾芭蕉の碑を目にした。それは、松尾芭蕉が今から 300 年以上も前に、北千住から松島まで当時の交通手段である徒歩で訪れたこと、これだけでも大変な偉業であると感じた。以前から松尾芭蕉に興味を持っていたので、宮城県内の奥の細道の足跡をたどってみることにした。

芭蕉は、元禄 2 年（1689 年）5 月 9 日（新暦 6 月 25 日）、塩竈から船で松島に着き、瑞巖寺、雄島、五大堂を訪れ、松島で一泊した。芭蕉は日本三景の松島を訪れて感激したあまり、ここでは一句も詠まなかったと記されている。芭蕉が松島を訪れたときの交通手段は船であった。その日は天候にも恵まれ、塩竈を午前 8 時頃出発、松島には正午頃に着船しており、所要時間は約 4 時間であった。

現在では、芭蕉が船に乗って塩竈から松島に至るルートに観光船が運航されているが、所要時間は 40～50 分かかかる。陸の国道 45 号線を車で瑞巖寺まで行くと、所要時間は約 14 分かかかる。このことから、交通インフラの充実は生活の利便性向上をもたらす、そのありがたさが実感できる。

芭蕉は松島で一泊した後、石巻、中尊寺、岩出山、鳴子、山寺を経由して象潟に向かった。鳴子までは平坦地が続くので、天候に恵まれれば歩きやすかったと思われる。ところが、今の山形県に入ろうとしたとき、尿前の関で芭蕉一行は役人に怪しまれ、そこを通るのにかなり難儀したらしい。この地を訪れてみると関所跡があり、行く手はうっそうとした林で覆われ、高低差がかなりあるので、階段を登るのが大変であった。大変なのはその先の鳴子峡で、芭蕉はその渓谷を渡るのに苦労したらしい。実際その渓谷を上から覗くと、深く切り立っており、岩登りでもしないと渡れないような地形である。現在では、逆ローゼ橋の橋が鳴子峡に架かり、歩いて数分で渡れる観光の名所になっている。

以上松尾芭蕉の奥の細道の一部を述べたが、当時の交通手段は徒歩であることを考えると、旅は命がけであったに違いない。その行程は、北千住から終点の大垣に至る道のりは 2400 km、所要日数が 150 日、これを単純に計算すると 1 日 16 km 歩いたことになる。現在においても、2400 km を車で移動することは大変だが、今日の道路交通インフラなくして旅することは至難の業だ。